

## 家族の会における男性介護者の心理的变化の研究

### - 認知症の妻を介護する男性介護者に注目して -

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
稲土 愛奈

本研究は、男性介護者の家族の会に参加する男性介護者が、家族の会への参加を開始し、その後も継続して参加するというプロセスの生成モデルを作成し、家族会に参加することで、彼らの心理面にどのような変化が生じるようになったのか、そしてそれがどのように介護に影響しているのかを、明らかにすることを目的とした。

対象は、I市社会福祉協議会が主催する男性介護者家族の会(以下「Iの会」)に参加する、認知症の妻を介護する男性介護者3名であった。1名ずつ半構造化面接を行い、得られたデータをM-GTAを用いて分析した。結果として得られた概念は【】、カテゴリーは[]で示した。

本研究から、男性介護者が、家族の会への参加を開始し、[仲間という存在]に出会うことで、【自分の介護に客観的】になり、[人に受け止められる]経験を通じ【病気への理解、被介護者への理解を深める】ようになるという、心理的な変化を経験していたことが明らかになった。

そして[仲間という存在]に[自分を受け止められる]経験が【援助を求める】選択をするように、介護に対しても影響をもたらしていることが明らかになった。

さらに、【自分以外のことにも積極的】になったことで、これらの変化を受けた【共感しあえる仲間に関わり合いに来る機会】に対しても意欲的に関わることにつながり、継続的な参加を促していることが示された。

本研究は「Iの会」に参加することで男性介護者にもたらされた 情緒的支援による心理的变化、客観的視点を持つことによる心理的变化、援助を求める姿勢に対する心理的变化を明らかにすることができた。

家族の会が、男性介護者に心理的变化をもたらす要因には、支援者の、[人に受け止められる]場づくり、[仲間という存在]づくりを支えながら【援助を求める】ようになる過程を信じて待つという姿勢も影響していると、筆者は考える。本研究に残された課題として、支援者の視点を明らかにすることが挙げられる。家族の会に参加することによる男性介護者の変化を、支援者も理解することが、今後の男性介護者への適切な支援を行っていくうえで求められると考える。